



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3246 号 2016.9.9 発行

不屈の心 広がる可能性 パラリンピック開幕



中日新聞 2016年9月8日
リオ・パラリンピックの開会式で、入場行進する日本選手団=7日、リオデジャネイロで(田中久雄撮影)

【リオデジャネイロ=本社取材団】障害者スポーツ世界最高峰の大会、パラリンピックの第十五回夏季大会の開会式が七日夜(日本時間八日朝)、ブラジル・リオデジャネイロのマラカナン競技場であり、過去最多の四千三百五十選手が競う十二日間が幕を開けた。

開会式のテーマは「無限の可能性」。南米初のパラリンピックは治安の問題

や市民の関心の低さが指摘され、開幕直前にはロシア選手団のドーピング問題を受けた不参加が決まるなど不測の事態もあったが、八万人の観客席は市民、各国の応援団や報道関係者で満員になった。

米国の車いすパフォーマー、アーロン・ウィールズさんが会場に特設された高さ十七メートルの急斜面を下ってジャンプしながら一回転。着地とともに天井の吹き抜けに金色の花火が上がり、拍手と歓声が湧き上がった。

下半身が不自由だがサッカーをしたいと願う息子のために脚の補助器具を作りペナルティーキックだけの競技を広めたブラジルのアレサンドレ・ファレイロスさんの足跡を映像で紹介。義足の女性がロボットとともにダンスを披露した。

下半身にまひがあり、パラリンピック競泳男子で六個の金メダルを獲得している地元のクロドアルド・シルバ選手が聖火を手に車いすで登場。階段を前に困っているとスロープが現れた。ジグザグに上って聖火台に点火し、バリアフリー社会の実現を表現した。

参加する百五十九カ国・地域と難民選手団のうち、同選手団が先頭で入場。日本選手団百三十二人の半数が音楽に合わせて八十二番目に登場し、車いすテニス女子の上地(かみじ)結衣選手=エイベックス=を旗手に笑顔で行進した。

大会は十八日まで。新たに正式競技になったトライアスロンとカーヌーを含め二十二競技を実施する。選手たちは体の一部のまひや切断、目や耳、知的などさまざまな障害があるため、同じ程度の障害の選手を決める「クラス分け」に応じた五百二十八種目で競う。

◆旗手の上地選手「緊張感持ち、結果残す」

旗手を務める車いすテニス女子の上地結衣選手=7日、リオデジャネイロで(田中久雄撮影)

車いすに固定した日の丸をはためかせ、白い歯を見せながら行進した。日本選手団の先頭で登場した車いすテニス女子の上地結衣選



手は、二度目の出場で旗手の大役。「アスリートの憧れの舞台で、日本代表選手団を先導できることは非常に光栄」と語った。

兵庫県出身。先天性の病気で車いす生活となったが、小学生で車いすバスケを始め、姉が軟式テニスを始めたのを機にテニスに転向した。二〇一四年、車いすテニスの全豪オープンダブルスで優勝し、同年の全仏オープンシングルスでも初優勝。世界ランキングはシングルス二位、ダブルス一位だ。

ロンドン大会はシングルス、ダブルスともにベスト8でメダルを獲得できなかったが、今回の目標は「金メダル」。二〇年東京大会も見据え、「緊張感を持って戦っていく。若い世代や競技人口が増えている。より注目してもらえるよう結果を残したい」と気持ちを引き締めた。（荘加卓嗣）

「壁」突き崩す力に 開会に寄せて

中日新聞 2016年9月8日

八月二日、東京都内で行われた日本選手団の結団式は重苦しい雰囲気の中で始まった。直前に相模原市で起きた障害者施設殺傷事件を受けて、選手団は黙とうをささげ、犠牲者の冥福を祈った。

全員が障害者である選手にとって、偏見と差別感情をむき出しにした事件の衝撃は計り知れない。日本パラリンピック委員会の鳥原光憲会長は「社会の変革が一段と進みつつある今日、このような犯罪を許すことはできない」と断じた。

前回ロンドン大会は、チケットが完売し、英国国民の意識の高さを裏付けたが、リオでは今のところ、低調ぶりが話題となっている。

ポルトガル植民地時代の名残と現代が混在する趣のあるリオの街を歩くと、歩道は段差だらけで、視覚障害者を誘導する類いの物は見当たらない。そもそも障害者の姿を選手以外ではほとんど見かけない。「ブラジル人は障害者を支えようという意識が低い」と指摘する市民の声も聞いた。

南米で初めて開催される意義は、こういったところにある。障害者アスリートが自らの持つ機能を最大限に生かし躍動する姿は、五輪同様、時にそれ以上、見る者を熱くさせる。それは健常者と障害者を隔てる「壁」を突き崩す力となっていく。

大会を経て、障害者が生活しやすい街にどう変わっていくのだろうか。地球の反対側だけの話ではない。先達である日本で起きた事件をどう受け止めるのか、一人一人が自らの「壁」を見つめる機会にもなる。障害の有無から、人種、国籍、性差…ありとあらゆる壁を。

ともあれ、まず観戦を楽しみ、声援を送ってみよう。開会式で行われたマラカナン競技場は、事前の予想を覆す熱気に包まれた。心を揺らすスポーツの祭典が始まった。（荘加卓嗣）

リオのパラリンピック会場 東京大会の準備チームが視察



NHK ニュース 2016年9月8日

日本時間の8日に開幕したリオデジャネイロパラリンピックの会場を4年後の東京大会の準備チームが訪れ、バリアフリー対策など障害者をどのように受け入れているかを調査しました。

調査に訪れたのは、4年後の東京パラリンピックの準備チームのメンバーで、組織委員会のアドバイザーを務める垣内俊哉さんなど6人です。

調査では、車いすの利用者や視覚障害者などの立場で、世界中から障害者が訪れているリオデジャネイロ市内の競技施設をはじめ交通機関や観光地でバリアフリー対策の進捗（しんちよく）や課題を調べます。

開会式の会場となったマラカナンスタジアムを訪れたメンバーたちは、車いすが通るスロープや専用の座席、トイレなどをひとつひとつ調べ、記録していきました。また、多くの観光客が訪れる市内の中心部やビーチでも、メンバーたちは歩道の幅や道路の段差などを調べていました。比較的新しい施設では、スロープが設置されるなど随所に配慮が見られる一方で、道路の段差や溝など障害者にとって危ない場所も次々に見つかりました。また、車いすの3人が公共バスを利用した際には、1人が乗り込んだところでドアが閉まり、止まるようドアをたたいたものの発車してしまうアクシデントもありました。

一方で、歩道橋の長いスロープを上っていたとき、ブラジル人のボランティアが声をかけ車いすを押し始めるなど、町なかで地元の人たちが自然な様子で手助けをする光景が見られました。手助けをしたブラジル人の女性は「すべての人に手をさしのべる必要があると思います。障害の有無で区別する必要はありません」と話していました。

開会式を視察した垣内さんは、大きな心臓をモチーフにして、障害のある人もない人も心は1つと呼びかけた大会のメッセージに共感した様子で、「設備のバリアについては、日本はブラジルに比べて改善されつつあると感じた。その一方で、ブラジルでは障害があることが当たり前になっていて、人々の向き合いかたに壁がないことは学ぶべきところが多くある。東京大会までの残された時間で、人々の意識のバリアを解消する努力が必要だ」と話していました。

準備チームは今後も現地調査を続け、東京大会に向けて具体的な対策を検討し、来月にも東京都や組織委員会などに提言することになっています。

トーチ持ち転倒、声援受け立ち上がり聖火リレー

読売新聞 2016年09月08日



トーチを落としたマルサールさん。観客の声援を受けて拾い上げ、次の走者につないだ（ロイター）

リオデジャネイロ・パラリンピックの開会式が行われたマラカナン競技場に到着した聖火は雨が降る中、障害者アスリートら4人によって火を絶やすことなく聖火台までつながれた。

1人目の男性からトーチを受け取った元陸上女子ブラジル代表のマルシア・マルサールさんは足を滑らせて転倒。トーチを落としたが、観客の声援を受けて元気に立ち上がると3人目の走者にリレーした。最終ランナーとなった競泳男子ブラジ

ル代表のクロダアルド・シルバ選手は車いすで階段から形を変えたスロープを使って聖火台へ。トーチをかざして聖火台に火がつくと、歓声とともに花火が何度も上がった。（畔川吉永）

柔道・広瀬誠、銀でメダル第1号 藤本と競泳・津川は銅 共同通信 2016年9月9日

リオデジャネイロ・パラリンピック第2日（8日）に競技が本格的に始まり、柔道は男子60キロ級の広瀬誠（愛知県立名古屋盲学校教）が決勝でウズベキスタン選手に一本負けしたが、銀メダルで今大会の日本選手団メダル第1号となった。

男子66キロ級の藤本聡（徳島県立徳島視覚支援学校職）は銅。女子48キロ級の半谷静香（エイベックス）は3位決定戦で敗れて5位だった。

競泳男子100メートル背泳ぎ（知的障害）決勝で津川拓也（ANAウイングフェローズ・

ヴィ王子)が1分3秒42で銅メダルに輝いた。女子100メートル平泳ぎ(運動機能障害S B9)の池愛里(東京成徳大高)と一ノ瀬メイ(近大)は予選落ちした。



男子60キロ級決勝 優勝したウズベキスタン選手(左)をたたえる広瀬誠(リオデジャネイロ)＝共同

男子100メートル背泳ぎ(知的障害)で銅メダル獲得を決め、ガッツポーズする津川拓也(リオデジャネイロ)＝共同

女子で2連覇を狙う日本は、1次リーグC組初戦でイスラエルと1-1で引き分けた。車いすバスケットボール男子で1次リーグA組の日本はトルコに49-65で敗れ、黒星発進。

パワーリフティング男子49キロ級の三浦浩(東京ビッグサイト)は126キロで5位だった。



リオパラ 晴れ舞台、仲間と…知的障害者水泳の津川拓也 毎日新聞 2016年9月8日



6月のリオ・パラリンピック水泳日本代表の壮行会で、知的障害者の代表で記念撮影する津川拓也(後列左から2人目)＝横浜市で2016年6月12日、飯山太郎撮影

理解訴え、CM出演

【リオデジャネイロ長田舞子、飯山太郎】知的障害者水泳に出場する津川拓也(24)＝ANAウイングフェローズ・ヴィ王子＝は所属先の親会社のテレビCMに出演し、日本でのリオ大会盛り上げに一役買って来た。日本の障害者スポーツで身体障害者のCM起用は増えてきたが、知的障害者は珍しい。母智江さん(52)は「知的障害者も頑張っていることを伝えられたら」と障害への理解が進むことを期待する。

津川が出演するのはリオ五輪開幕前の7月下旬から放映され、五輪・パラリンピックの日本代表計9人が登場する全日空のCM。2種類あり、10年前の自分にメッセージを送るバージョンで、リオ五輪で銅メダルを獲得した卓球女子の福原愛(ANA)と競泳男子の瀬戸大也(早大)、パラリンピックで車いすテニス男子シングルス3連覇を目指す国枝慎吾(ユニクロ)らの最後に津川が登場し「楽しいよ。仲間が待っているよ」と一言一言に力を込めて語る。

この言葉は智江さんが「10年前なら拓也は14歳で中学生の時だよ」と話しかけながら津川と考えた。今は応援してくれる仲間や同僚に囲まれ楽しいということを伝えたくて「拓也自身の気持ちがこもっている」という。

大阪市生まれの津川。障害が分かったのは1歳半の頃。喜怒哀楽がなく、その後に重度の自閉症と判明した。父が実業団水泳部の監督を務めつつ今も現役の水泳選手というのもあったか、智江さんは「プールに入るに違いない」と考え、3歳で水泳を始めさせた。

中学では水泳部で練習し、健常者並みのタイムを残すようになった。2009年に東京で開かれたアジアユースパラゲームズを機に国際大会に出るようになり、12年ロンドン大会も出場した。実績が評価され競技活動を続ける条件で、全日空の子会社のANAウイングフェローズ・ヴィ王子(東京都)に昨年7月に採用された。

全日空の担当者は津川のCM起用を「子会社の社員なので当然」と説明する。ただ「同じような境遇の人たちに何かのメッセージを送ればと、お母様が快諾してくれた」とも言う。リオ入り後、津川は「100メートル背泳ぎでメダルを取る」と意気込む。

リオパラ 夢の舞台、やっと…知的障害者卓球の伊藤慎紀 毎日新聞 2016年9月8日 世界を目前、競技除外

【リオデジャネイロ飯山太郎】7日夜（日本時間8日午前）に開幕したりオデジャネイロ・パラリンピック。開会式で知的障害者卓球女子シングルの伊藤慎紀（まき）（32）＝ひなり＝は晴れやかな表情で入場行進した。知的障害者は2000年シドニー大会での障害偽装問題でパラリンピックから事実上追放され、12年ロンドン大会で再び門戸が開かれた。待ち続け、初めて夢の舞台に立った伊藤は「金メダルを取りたい」と意気込む。

伊藤は横浜市出身。知能に発達遅れが見られたものの、小中学校とも普通学級に通った。中学進学を機に父文朗さん（62）の実家のある神奈川県鎌倉市に引っ越した。

卓球との出会いは、中学に入学し担任教諭から「部活はどうします」と聞かれたこと。母享子さん（56）は「運動部とかだめですかね」と返した。担任の「そんなことはない」との言葉と、顧問の「できる範囲でやればいい」との理解で卓球部に入った。

享子さんが「卓球が楽しみで学校に行っていた」と言うように伊藤はのめり込んで腕を上げ、1998年5月の知的障害者の卓球日本一を決める大会で中学生ながら4強入り。同年夏のアジア・オセアニア選手権で準優勝を果たした。

世界も見えてきた中で開かれたシドニー・パラリンピックの知的障害者バスケットボールで、金メダルを獲得したスペイン代表に健常者が交じっていたことが判明した。これを受け、04年アテネ、08年北京両大会は知的障害者の競技が実施されなかった。

伊藤は競技復活を信じて競技を続けた。「長い目で見ると、卓球のおかげで生活サイクルができた」と振り返る享子さん。特別支援学校に進学し卒業後も民間のスクールなどで練習を重ね、規則正しい生活が身についた。

知的障害者の競技はクラス分けの手法が確立されたとしてロンドン大会で復活したが、伊藤はアジア選手権で敗れて出場を逃した。しかし、14年の障害者卓球の世界選手権では、シドニー大会代表だった長年のライバルとのコンビで知的障害者の部で優勝。今年1月には世界ランクで日本人最高の4位となり、初のパラリンピック出場を決めた。

享子さんには「もう少し早く出られていれば」との思いがある。続けた練習が過度の負荷になって伊藤は昨年右肘などに故障を抱えるようになった。

「慎紀のピークはもう過ぎたかもしれない」と享子さん。20年東京大会の出場も見通せない。だからこそ8日に誕生日を迎えて32歳で臨むパラリンピックでは「とにかくベストを尽くして」と願う。

Eテレ「バリ・バラ」が「24時間テレビ」に一石 日刊スポーツ 2016年9月8日

日本テレビ系「24時間テレビ」の最終日だった8月28日に、Eテレ「バリアフリー・バラエティー」（日曜午後7時）を生放送したNHK大阪放送局の角英夫（かど・ひでお）局長が8日、定例会見を開き、視聴者から賛否両論の意見が多数あったとし「一定程度の関心は持ってもらえた」と感想を語った。

「24時間」はこれまで、障害に関するドラマやチャリティーマラソンを企画し、毎年夏恒例の大型特番となっている。今回Eテレでは、そのフィナーレにあたる「日曜午後7時」の放送時間帯を利用し「障害＝感動」の図式に一石を投じるべく、生討論会として放送した。インターネット上では「Eテレが本気出してる」「Eテレ攻め過ぎ」など多くの反響を呼び、視聴者の注目を集めていた。

これについて角局長は「確かにネットなどで反響があったことは認識している。普段、

ご覧いただいていない視聴者の方も、関心を持っていただいたのかなとは思う」とコメント。「24時間テレビ」と同時時間帯に生放送にした“挑戦”には「さまざまな形式で関心を持ってもらおうと、スタッフが考えてきた策の一環」とした。

同局によると、番組への視聴者の意見数は公表していないという。内容については「好意的なものから、批判の意見もあった」。また、その内容には『よくやった』もあれば、『やり過ぎだ』という声もいただいた」と説明した。

淡路の障害者施設で虐待 入所者を平手打ち 神戸新聞 2016年9月9日

兵庫県淡路市野島貴船の障害者支援施設「フローラほくだん」で、複数の職員が身体障害のある入所者を平手でたたくなどの虐待をしていたことが、兵庫県洲本健康福祉事務所への取材で分かった。同事務所は今年6月に施設を運営する社会福祉法人「淡鳳（たんほう）会」に改善勧告を行い、改善報告書の提出を受けた。

同事務所などによると、虐待はいずれも介助中に発生し、2014年3月に入所者の男性が男性職員から手で顔をたたかれた。今年3月には別の入所者の男性が別の男性職員から平手で頬をたたかれたという。いずれも大きなけがはなかった。同法人は虐待の事実を認めているという。

洲本、南あわじ市に通報があり、両市が虐待と認定。同事務所も監査（立ち入り検査）を実施し、文書・口頭で是正・改善を指導した。しかし、その後の監査で「実効ある対策が十分でない」として勧告に踏み切った。

勧告によると、14年1月から通報や相談が相次いでいたといい、「虐待防止に取り組む積極的な姿勢が乏しい」などと指摘。同法人の担当者は「今後は絶対に虐待を起こさないよう対策をしている」と話している。

県内では12年10月の障害者虐待防止法の施行以降、福祉施設での職員による虐待件数は14年度末現在で計30件。うち28件が文書・口頭での指導で、より重い勧告は2件だった。改善命令や指定停止・取り消しに至った例はない。（切貫滋巨）

中野区、重度障害者ホーム整備 事業者に区有地を無償貸与 東京新聞 2016年9月9日

中野区は8日、同区江古田の区有地を民間事業者は無償で貸与し、重度障害者のグループホームを整備すると発表した。利用対象は支援区分の重い人が中心で、医療的ケアを受けられるようにする。

整備するのは、障害児の通所施設が移転して空いた約千六百六十平方メートルのうち北側約八百八十平方メートル。障害支援区分が最も重い六と五の人を原則八割以上にし、看護師が常駐してケアを行う。定員は共同生活者が十七人、短期入所と日帰り利用が計三人。来年一月に運営事業者を決め、二〇一九年一月の開業を目指す。予定地の南側には認知症高齢者のグループホームなどを別に整備する。

重度障害者が利用する施設は、リクライニングする車いす用に広いエレベーターや居室が必要で多額の費用がかかるため、整備が十分に進んでいない。今回区は、独自に補助金も出して事業者を後押しする。

支援区分が六と五の同区の障害者は計三百五十九人で、うち百八十一人が自宅で暮らす。家族が高齢になり自宅での介護が難しくなったり、先に亡くなった場合に備え、地域で暮らせる場所を求める要望があった。区は同様の施設をさらに整備し、十年以内に他に三十人分の定員を確保する。（石原真樹）

【論説】パラリンピック あらゆる壁払いのけよう 福井新聞 2016年9月9日

リオデジャネイロ・パラリンピックが開幕した。159カ国・地域と難民チームから史

上最大の約4300選手が参加、自分の限界に挑戦する。それは人間の限界を超えて未来の可能性を開くものだ。本県から陸上の視覚障害者マラソン女子に西島美保子選手が出場する。決して平坦ではない道を歩み続け、晴れの舞台に立ったアスリートたち。五輪に負けない熱い戦いと、五輪以上の感動が生まれることを期待したい。

障害者スポーツで特筆すべきは革新的な器具が続々登場していることだ。選手たちのスピードと跳躍力は健常者に劣らぬ素晴らしい記録を生みだしている。

開会式で国際パラリンピック委員会（IPC）のクレーブン会長は「選手の勇姿はあなたを変えるだろう」と全世界にメッセージを發した。選手や障害者だけではない。次世代のアスリートや人々の心、社会をも変えていく力がパラリンピックには宿っている。

132人を派遣した日本選手団の主将を務める車いすバスケットの藤本怜央選手は結団式後こう語った。「競技人として、スポーツでまだまだ伝えることがある。それがパラリンピアンとしての自分の役割だ」

相模原の障害者施設殺傷事件を受けての気持ちを込めたものである。容疑者は「障害者なんていなくなればいい」と犯行の動機を供述した。障害者に対する偏見と差別、排他性を助長する社会の風潮もある。困難な壁を乗り越えて戦う選手たちの姿を心に刻みたい。

雨中の開会式となった聖火リレーで転倒し、トーチを落とす場面もあった。スタッフに抱き起こされ、再び歩み始めた走者を包み込む大声援は、共生社会の重さを映し出していた。

今回のリオ五輪は国家主導のドーピングが暗い影を落とした。パラリンピックの選手でも行われていたとして、IPCはロシアを全面除外。「薬物が入り込めば大会の将来はない」と五輪以上の厳罰に処した。ロシアは前回大会で中国に次ぐ第2位の金メダル数だった。パラリンピックまで国威発揚に染まる現実を怒りを感じる。全世界の障害者選手に対する冒涇（ぼうとく）である。

開会式では就任したばかりのテメル・ブラジル大統領が激しいブーイングを浴びながら開会宣言した。汚職疑惑や国内の政治混乱に対する国民不満の根深さが浮き彫りになった瞬間だ。これも成熟した環境が整備されていない南米開催の困難な現実であろう。

日本は2020年東京大会に弾みをつけるべく金メダル10個を目指す。それも重要だが、運営面の安全性や膨らむ経費抑制などを学び取る機会でもある。

障害者には日常生活の中で気軽に運動できる環境も十分整わず、アスリートに対する指導者不足も課題とされる。障害者スポーツの発展へ、4年後には最高の舞台をつくり上げたい。

社説：リオ・パラ開幕 ここにも薬物汚染が影落とす 読売新聞 2016年09月09日

リオデジャネイロ・パラリンピックが幕を開けた。リオ五輪の余韻が残る中、障害者のスポーツの祭典にも、熱い声援を送りたい。

夏季パラリンピックは今回で15回目となる。元々は障害者のリハビリの延長と捉えられていたが、回を重ねるごとに、選手の競技力は高まる一方だ。鍛錬を重ねるトップ選手は、アスリートと呼ぶにふさわしい。

障害を抱えながらも、メダルに向かって努力する姿は、障害者だけでなく、健常者にも大きな力を与えてくれる。

大会には159の国・地域から約4300人が参加する。

日本選手は、22競技のうち17競技に132人が出場する。「金メダル10個」などの目標を掲げている。2008年北京、12年ロンドンの大会での金メダルは、いずれも5個にとどまっただけに、巻き返しが期待される。

車いすを極限まで軽量化するなど、日本企業の高い技術力が選手の活躍を後押ししている。競技性が増してメダル争いが激化した結果、負の側面として顕在化したのがドーピングである。

国ぐるみのドーピング隠しが暴かれたロシアでは、パラリンピック選手にまで薬物汚染が広がっていることが分かった。国際パラリンピック委員会（IPC）は、ロシア選手の今大会への出場を一切認めないことを決めた。

国際オリンピック委員会（IOC）は、ロシア選手のリオ五輪出場を条件付きで認めた。その甘い対応と比較すると、IPCの厳格な姿勢が際立つ。

IPCのフィリップ・クレーブン会長は「決定がロシアの変革の契機となり、公正な競争が確保されることを願う」と強調した。うなずける判断である。

「政治的な決定だ」などというロシア側の反論は筋違いだ。

パラリンピックでは、治療のために薬剤を日常的に使用している選手が少なくない。ドーピング違反に問われる禁止薬物であっても、きちんと手続きを踏めば、特例として使用が認められる。

ルールを守ってこそ、競技は成り立つ。薬物を不正に用いて隠蔽するロシアの行為は、フェアプレー精神を冒瀆するものだ。今大会では、資金難などによる競技運営の不安も指摘される。4年後の舞台は、東京だ。都や大会組織委員会は、今大会の問題点をつぶさにチェックし、東京パラリンピックの成功に結び付けることが大切である。

【主張】パラ五輪開幕 東京大会の成功に向けて 産経新聞 2016年9月9日

リオデジャネイロで、パラリンピックが始まった。史上最多の約4300選手が参加する。開会式では各国選手の満開の笑顔が印象的だった。

マラカナン競技場のスタンドは大観衆で埋まった。大会組織委員会のヌズマン会長は「選手の皆さんは人間の限界を超えた私たちのヒーローだ」と述べて拍手を浴びた。スピーチは政府への謝意をめぐるブーイングで中断されたが、これをかき消す大歓声で再開された。

前回ロンドン大会は連日各会場が満員となり、史上最高のパラリンピックとたたえられた。これを引き継ぐリオ大会にも、大いに期待を抱かせる開会式だった。

パラリンピックは、パラプレジア（脊髄損傷による下半身まひ）とオリンピックを合わせた日本人による造語で、初めて五輪と同一都市で開催された1964年東京大会の愛称となった。その後「パラレル（並行）オリンピック」の略と解釈が変更され、88年ソウル大会から正式名称とされた。

「もう一つの五輪」として、開催都市には五輪と同等か、それ以上の成功が求められる。

ロンドン在住で、東京五輪招致のプレゼンを演出したマーティン・ニューマン氏は「私たちは障害者をかわいそうだと思っていましたが、大会で出会ったのは偉大な人々でした。ロンドンが成功したのではなく、パラリンピックがロンドンを変えたのです」と話した。同じ奇跡がリオにも、4年後の東京にも起きてほしい。

国際パラリンピック委員会（IPC）はドーピング問題でロシア選手団を全面的に除外した。五輪への条件付き参加を許した国際オリンピック委員会（IOC）の対応とは異なるが、障害者であるからこそ強く公正、公平を求めた決断であり、これを支持したい。

IOCは判断を誤った。「全面除外は無実の選手に巻き添えの被害を与える」との言い分はもっともらしく聞こえるが、違反に罰則がなくては競技は成立しない。世界反ドーピング機関（WADA）がロシアの不正は国家機関の主導によると断定した以上、罰すべきはロシアの国家だった。

具体的には選手団としての参加と国旗国歌の使用を禁じ、潔白が証明された選手のみ、個人として参加させるべきだった。4年後の東京大会も、厳正で高潔な判断の下で行われてほしい。

